

次男坊の鬱屈 ～「菅原・加茂堤」を読む～

犬丸 治

はじめに 歌舞伎を研究するには

現役学生諸君は、本年度の三田祭で「寺子屋」を上演する。その際の心得は、6月21日の歌舞伎講座で、渡辺保放送大学教授が委曲を尽くして解説したので、ここでは繰り返さない。歌舞伎はまず「型」。「型は心」と言われ、そこには当然役の「性根」(心理・性格)が裏打ちされなければならないが、初心者はまず師の教えた型を忠実に守るべきである。心はそのあとに付いてくる。

大切なのは、言うまでも無く実際の舞台を見ること。不幸にして上演されていない、ビデオ・DVDを繰り返し見ることである。しかしここには重大な陥穽がある。映像は、どうしても主役がアップになる。シテの演技をワキがどう受けたか、舞台上の役の居どころが曖昧なのと、劇場空間で観客と役者との間で醸し出される独特の空気を記録していない。

実際の舞台であれだけ大きく見えた役者の芸が、ビデオでは表層的にしか記録されないのは、アップによってシテとワキ、観客の三位一体関係が喪失しているからである。従って映像資料は、あくまで「参考」ととどめるべきで、過信は禁物である。

今回のような丸本歌舞伎に取り組む時は、是非義太夫でその作品を聴いて欲しい。

人形浄瑠璃の義太夫と、歌舞伎竹本は、似て非なるものと考えて良い。

前者が人形・三味線と一体となってドラマを構成する純然たる語り物なのに対し、後者はあくまで役者の演技の従属物だからである。歌舞伎初心者が口を揃えて「丸本歌舞伎は退屈」と言うのは当然で、役者の演技や思い出に合わせて、竹本が間延びし、伴奏音楽に墮す傾向が強いからである。竹本の糸と、役者の演技がピタリとはまる時の絶妙な快感を楽しむには、それなりの時間と修練が必要だ。といっても、難しいことではない。要は感性が磨かれて行くのだ。

「丸本歌舞伎」を理解するには、まずは文楽の義太夫を聴いてほしい。イキを詰んだコトバと三味線がかもし出す劇的な緊張。そのドラマの骨格が、ダイレクトに伝わり、必ず役作りに役立つはずだ。

山城少掾・三代目・四代目清六、綱大夫・弥七といった名人の芸に触れられれば最良だが、「寺子屋」なら、越路大夫・喜左衛門、住大夫・燕三のCDは入手が容易である。

以下は、より深くに「寺子屋」を研究したい人の為の簡略な手引である。

まず「原典」を読む

作品研究の基礎は、まずテキストである。それも、「名作歌舞伎全集」に所収されているよ

うな歌舞伎化された台本ではない。浄瑠璃正本、いわゆる「本文」である。

なぜ浄瑠璃本文を読む必要があるのか。

浄瑠璃は、全五段・或いは十一段で構成された、それ自体が一個のドラマである。荘重大序に始まり、最後に善人栄え悪人滅び、天下泰平五穀豊穰をことほいでこそ、ドラマは完結する。

歌舞伎が人形浄瑠璃に圧倒され、弱体化していた時代は、歌舞伎は浄瑠璃をそのまま劇化していた。しかし、歌舞伎とは本来役者本位の演劇である。役者が引き立たない場面は次第に簡略化・割愛された。さらに、「お馴染みの」名場面として定着するに従って、その場面のみが繰り返し上演される「見取り狂言」の傾向が強まった。

「菅原」で言えば、「大序」の大内、「二段目」の道行・安井の浜汐待ち、「四段目」の寺子屋の前に位置する天拝山・北嵯峨、時平が斃される「五段目」の大内は殆ど上演されない。歌舞伎で「通し狂言 菅原」といった場合、それは「見取り狂言」の集合体といっても良いのである。

これでは、作者が込めた本当の作意は伝わらない。長年に亘って役者が付け加えて来た「入れ事」と呼ばれるアドリブや、役を良く見せようとした仕勝手。これはこれで歌舞伎の融通無碍な豊かさでもあるのだが、本当に「菅原伝授手習鑑」を読もうとする場合、それらを極力排し、本文に当たる姿勢が必要になって来るのである。

浄瑠璃「菅原伝授手習鑑」全文は、

「帝国文庫 浄瑠璃名作集」「有朋堂文庫 海音・半二・出雲・宗輔傑作浄瑠璃集」「岩波文庫」「日本古典全書 竹田出雲集」などに所収されている。図書館でコピーするのも方法だが、ここで実に重宝なサイトが現れた。

音曲の司 <http://ha2.seikyoku.ne.jp/home/Kumiko.Tada/ongyoku/>

である。

文楽の批評研究を趣旨としたサイトだが、ここの「情報資料室」の「書籍・文書」には、主な浄瑠璃集の本文がPDFで容易に閲覧することが出来る。

このうち、「日本名著全集 浄瑠璃名作集 上下」は、所収作品の多さと読みやすさで、筆者も古書を架蔵し、重宝している。これを参照すると良いだろう。

このサイトでは閲覧できないが、「岩波古典文学大系 文楽浄瑠璃集」がある。これは実際に上演される際大夫が使用する床本をそのまま掲載し、義太夫の曲節・人形の動きなどが詳細に注記されている。先ほどの義太夫CDを聴きながらこの本を読むと、義太夫理解の一助になると思う。

但し、作品全文では無く、各段の最重要場面である「切場」を中心に（「寺子屋」なら「寺入り」「寺子屋」）編集されているので注意が必要だ。

型・芸談の収集

松王なり、源蔵なりを演じていくと、当然のことながら「なぜこの型なのか?」「この時の役の心得は何か?」といった疑問が湧いて来る。

そうした時は、名優名人の芸談や、ほかの型の記録、劇評に当たることが大切である。

たとえば「寺子屋」は、

杉廩阿弥「舞台観察手引草」、三宅周太郎「演劇巡礼」「歌舞伎研究」、武智鉄二「かりの翅」「蜀犬抄」「歌舞伎の黎明」あたりが必読書となろう。

また、「演芸画報」「新演芸」「演劇界」「幕間」「季刊雑誌歌舞伎」「歌舞伎研究と批評」などの雑誌紀要も参考になる。「演芸画報」は明治以来戦中まで連綿と続いているので記事が膨大で、「演芸画報総索引」(国立劇場芸能調査室編)を座右に置くと便利である。

実際に購入しようと思えば、都内なら

木挽堂書店(歌舞伎座脇) http://homepage3.nifty.com/kobikido_shoten/

豊田書房 <http://jimbou.info/town/ab/ab0108.html>

の「歌舞伎古書専門店」がある。

図書館なら、慶大図書館・都立中央図書館なら大概の本を読めるが、歌舞伎専門なら

松竹大谷図書館 <http://www.shochiku.co.jp/shochiku-otani-toshokan/>

早稲田大学演劇博物館 <http://www.waseda.jp/enpaku/>

国立劇場図書室 <http://www.ntj.jac.go.jp/useguide/lib.html>

がある。特に演劇博物館のサイトでは、同館が所蔵する膨大な芝居絵が瞬時に検索することが出来る。この機能を使って、江戸期の名優たちの「寺子屋」の演出の変遷を辿るのも一興である。

しかしそれでも時間がない、という人には、国立劇場芸能調査室が公演のたびごとに出版している「上演資料集」を勧める。その作品の上演年表・解説・研究・型の記録・芸談・参考文献一覧が網羅されている。

悲劇の原点・「加茂堤」

「加茂堤」は、初段・大内で、病中の天皇に代わり渤海国の使者に肖像を描かせようとする藤原時平と、それを諫める菅丞相という、緊迫した政治的対立の後に描かれる。恋仲の皇弟齋世親王と、丞相の養女(実は伯母覚寿の娘なので、従妹)刈屋姫。その逢瀬の仲立ちをする舎人桜丸と女房八重。嫋々たる色模様は、居合わせた三善清行に見咎められ、丞

相流罪、桜丸自害、御台所・菅秀才捜索（即ち「寺子屋」）へと暗転していく。短いこの場は、菅原家にとっても、「下々の下々たる牛飼舎人」（「賀の祝」の桜丸の述懐）である白太夫家の三兄弟にとっても、運命の結節点なのである。

普通歌舞伎の「加茂堤」は、桜丸夫婦の恋の仲立ちと、親王らの出奔に絞って上演される。しかし、実はその前の本文が重要なのである。そこに実は、白太夫家、特に松王丸に内在する悲劇の発端を、作者は入念に描き込んでいるのだ。

今は昔、四郎九郎という百姓の家に世にも稀な三つ子が生まれた。「死んだ女房が産んだ時は辺り隣の外聞。ひよんな事ぢゃ」（「三段目」茶筌酒）と思った四郎九郎。当時は多産は畜生腹と忌まれたこともあったのだろう。ところが、「三つ子は天下泰平の相。舎人にすれば天子の守りとなる。成人さして牛飼に差し上げよと。菅丞相様のお執成で御扶持まで下され」（「加茂堤」）、今は菅原家の領地佐太村の下屋敷で丞相の愛樹梅桜松を預かって安楽に暮らしている。三兄弟の名はこの愛樹にちなんで菅丞相が名づけたものだ。しかも、梅王は菅丞相の膝下に置き、松王は藤原時平に、桜丸は齋世親王の舎人にと就職の世話までし、烏帽子親にまでなった。七十歳を迎えて年頭の挨拶に上がった四郎九郎は、菅丞相からその長寿を祝われ、「白太夫」の名を賜った。恐らく「四郎九郎」の「四郎」を「白」と読み替えたのだろう。

ここまでで大切なのは、白太夫一家がもともと菅原家の家臣ではなく、「三つ子」を縁にした「恩」によって繋がっていることである。無論、白太夫と梅王は、菅原家の扶持を頂く家臣である。しかし松王は時平、桜丸は齋世を主君として仕えている。

一方に菅原家への「恩」（しかも烏帽子親とは元服に立会い、親同然である）があり、松王・桜丸（特に松王）は主君への「忠義」に引き裂かれている。

しかも、丞相が松王を時平への舎人に配したのは「三つ子は天下泰平の相。舎人にすれば天子の守りとなる」との配慮であり、これがまた松王の行動を縛ることになるのである。

この丞相の配慮が、「天下泰平」を望む純粋な動機なのか、時平の野望を牽制する要員として、松王を配したのか、解釈が分かれるところである。しかし、浄瑠璃に描かれる丞相は、「道明寺」で明らかなように、典型的な「聖人」である。性善説に立ち、疑いを知らない。前者と考えると良いだろう。とすれば、名づけ親であり大恩ある丞相の配慮を、時平の家臣である自分が裏切っていくことに、身を切られる思いだったことは想像に難くない。

「引捨つる、車は松に輪を休め、舎人二人は肱枕」。 「加茂堤」は、梅王・松王兄弟が牛車を休めてまどろむ風景から始まる。「二輦並べし御所車、かたへは藤原、かたへは菅原、道真公の名代は左中弁希世、時平公の代参は三善清貫、加茂明神へ御惱の祈願、神子が湯立のその間、眠るむまさは加茂堤、夢に夢をや結ぶらん」。 昼下がりに、公園の緑陰で車を止めている公用車運転手というところか。ここには、その後一家兄弟を引き裂く悲劇の予兆すらない。

はじめに目を覚ましたのは梅王である。「コリヤヤイ松王丸、そちが主の時平公は、短気者でも根が大鳥。名代にわせた清貫殿は短いくせに根が悪者。呼び使ひを受けぬうち目を覚まして往かいでな」。これに松王は、「ホウ梅王の言はるゝことわいの。こなたの主の名代に来た希世殿こそ大邪人。蓼喰ふ虫も好き好きとあの和郎を弟子にしたり、代参におこしたりなさるゝ、菅丞相のお心が知りたい」と答える。丞相の愛顧を受けてエリートコースまっしぐらの梅王が、松王を見下している。それに対して松王は、秘かに時平に内通している丞相の弟子希世への注意を促し、暗に丞相のワキの甘さへの危惧を示唆しているのである。あからさまに言ってしまうと、松王の時平に対する不忠になる。

梅王の長広舌はまだ続く。「イヤ、そりやその方達が小さい料簡と(註・丞相とは)は違ふ。聖人の胸の広さは、こちらが身にも覚えのあること。斎世の宮様の車を引く桜丸と、われとおれと三人は、世に稀な三つ子」と、自分たちの出生の謂れを延々と述べ、「御寵愛の三木の名を我々にお付けなされ、おれを兄のお心でか梅王丸、とお呼びなされて召使はる。その方は松王丸、桜丸は宮の舎人、烏帽子親といふ御恩のお方、家を隔てゝ奉公すると、必ず徒疎かに思はぬがよいぞよ」と御説教である。

ここで大切なのは、梅王丸が兄貴格、松王が次男坊ということである。現行の歌舞伎の「車引」で、三兄弟のうち松王だけが襦袢の色が違っていたり、「賀の祝」で松王が「御兄い様を足蹴にしたな」と言うのは、座頭役者が松王を演じる様になってからの弊害である。梅王の兄貴風に、さすがに弟も「ア、ぐどくと長談義説く人」と不快感を隠せない。しかしそれがそれ以上の喧嘩口論に発展しないのは、この時点で丞相・時平の対立が決定的ではなく、あくまでも舎人たちにとっては雲の上の出来事だからである。

「もう斎世の宮もお参りなされ、牛休めに桜丸も来さうなものじゃ」「ム、なんぞ用があるか」「ハテ、佐太村の親父様から、来月は七十の賀を祝ふ程に、三女夫(みみょうと)連れで来いと人おこされた。その事を言はうと思ふて」「ム、ソリヤ銘々に人が来てよう知つてゐる。思へば親父殿は負はず借らずに子三人と、果報な人ではあるはい」。この会話からは、父白太夫の賀を心から祝う兄弟の仲のよさが伝わってくる。それだけに、後段の「寺子屋」に至る松王の悲劇は深刻である。

丞相流罪後、時平へのテロを企てた梅王・桜丸を松王は引き止める。それは主君時平への「忠義の働き」と同時に、兄弟の軽挙妄動への警告ではなかったか。

「賀の祝」で自ら勘当を願うのも、彼自身精一杯の親兄弟への詫びであったろう。「情けなやこの松王は時平公に従ひ、親兄弟とも肉縁切り、御恩受けたる丞相様へ敵対。主命とはいひながら、皆これこの身の因果。何とぞ主従の縁切らんと」という「寺子屋」での述懐を考える時、「賀の祝」の時点で、将来「反時平」的行動に出ることを心中深く期し、その時類が親族に及ばぬよう、先手を打ったという解釈も成り立とう。

しかしそれらは、あくまで「文学的解釈」であって、演者の「ハラ」として押さえ、表面は手強い敵役で押し通さなければならない。浄瑠璃の「モドリ」の本義はそこにある。

「思ひ出だすは桜丸、御恩送らず先立ちし、さぞや草葉の蔭よりも、うらやましかる、け

なりかる。悴が事を思ふにつけ、思ひ出さるゝ出さるゝと、さすが同腹同性（どうぶくどうしょう）を、忘れ兼ねたる悲嘆の涙。ノウその伯父御に小太郎が、逢ひますはいのとり付いて、わつとばかりに、泣き沈む。因果（運命）によって、松王は時平の臣下となった。そして、間接的にではあるが、弟桜丸を死に追いやった痛恨。それに比べて便々と生きている次男坊の自分は何なのか。その孤独の中で、独り小太郎を身替り首に仕立てる松王の心根が哀れである。同時に「その伯父御には小太郎が」という千代の言葉が、政治に翻弄され、祖父・嫁・孫と離散した白太夫一家の悲劇を鮮やかに映し出し、「眠るむまさは加茂堤、夢に夢をや結ぶらん」という「加茂堤」の牧歌的な、そして決して返らぬ過去と照応するのである。